








仮説を立てて読む


右の古文書を読んでみましょう。最初の3文字は「東海道」です。次の

は何と読むのでしょうか。古文書を読む時のコツの一つが、どのような順番で書かれているか見ることです。がという感じで書いてあることがわかると、「原」という字ではないか、という想像ができます。

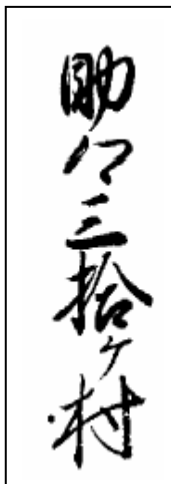
次にですが、の部分「宀(ウ冠)」ではないか、の部分「百」とか「石」ではないか、と連想できれば、「東海道原」と合わせて、「宿」? 「宿」? という仮説を立てられます。最後の3文字が「すけごうちょう助郷帳」(「帳」はやや難しい)だということも考え合わせると、「助郷」とはさんきんこうたい参勤交代などに使う人馬を周辺の村から提供する制度ですから、宿場に関係ありそうということで「宿」? という仮説が補強されます。さらに東海道の宿場を調べると、沼津宿と吉原宿の間に原宿という宿場がありま





す。これで、は「宿」に決定です。


このように古文書を読むには、ただ“何という字か”を考えるだけではなく、歴史事典やインターネットなどを使って、いろいろと仮説を立てながら読んでいくことがとても重要です。なお、最近のパソコン・ワープロソフトは「手書き文字入力」の機能がついてい

ます。も「宀」に「百」? など、仮説を立てて手書き入力してみると、“こんな字があったか”と候補が浮かび上がってくることもあります。

では、左の字はなんと書いてあるのでしょうか。「助 三ヶ村」(の部分は



不明)くらいまでは何とか読めそうです。では、はに分かれています。左は「」、右は、先ほどの「原」と同じように、どのように書かれているかを観察すると「合」とか「令」とか思い当たるのではないのでしょうか。すると、「」に「合」で「拾」。ここで、「拾」というのが「十」と同じだということに気がつけば、「三拾ヶ村」(30ヶ村)だとわかります。ではそ

の前の「」は? 実はこれは「郷」という字ですが、相当くずれていますので、

「原」や「拾」のように、どのように書かれているかを観察してもわかりません。このようなすごい崩し方をする字は、一つずつ覚えていくしかありません。

が、数はそんなにありません。

